

調査報告

血圧測定は離床時の有害事象に影響するか

離床時のリスク管理として、血圧測定は主要な方法である。我々は先行研究¹⁾において、職種により、離床時の血圧測定の頻度に違いがあることを明らかにした。この度、離床時の血圧測定の有無により、有害事象の経験に差があるか調査をしたので報告する。

方法

調査期間：2018年5月18日～2018年5月21日
調査対象：日本離床研究会教育講座のアンケートのうち、離床に直接関わる回答者657名
対象職種：医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士
調査方法：質問紙法

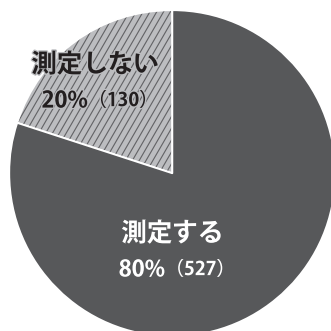
●設問

- Q1. 2回目以降の離床に関わる際に血圧測定は行いますか
Q2. 今まで離床に関して経験したことがある有害事象を教えてください

●方法

離床時に血圧測定をする群としない群の2群に分け、離床時に経験した有害事象について調査を行い、その割合について検討した。群間における割合の差については、カイ二乗検定を用い、有意水準5%未満を有意差ありとした。

結果



結果1 2回目の離床時に血圧測定を行うか

有害事象	測定しない n=130	測定する n=527	P値
死亡	1.5%	4.2%	n.s
昇圧剤の増量	3.8%	5.9%	n.s
致死的不整脈の出現	1.5%	3.8%	n.s
ショック	7.7%	4.0%	n.s
痙攣	1.5%	6.8%	<0.02
失神	27.7%	20.5%	n.s
嘔吐	36.2%	37.2%	n.s
呼吸状態の悪化	38.5%	39.8%	n.s
神経学的所見の悪化	6.2%	6.1%	n.s
循環状態の悪化	43.8%	47.2%	n.s
事故抜管	6.9%	4.0%	n.s
転倒・転落	32.3%	21.3%	<0.01
装着・挿入機器のトラブル	7.7%	6.3%	n.s
自覚症状の出現・増悪	75.4%	78.0%	n.s

結果2 離床時に経験した有害事象

考察

結果1より、離床時に血圧を測定すると回答した者が多数であった。離床時に血圧測定をしないと回答した者は、代わりに患者状態を確認する方法として、脈拍の測定や自覚症状の観察など、フィジカルアセスメントを行っているかと回答した。

結果2より、血圧測定の有無によって、「痙攣」と「転倒・転落」については2群間で有意差を認められたが、その他の項目については差を認めなかった。特に、血圧測定により得られる循環アセスメントと直接関連する、昇圧剤の増量、ショック、失神、循環状態の悪化、について発生経験に差を認めなかった。このことから、臨床においては、離床時の血圧測定に頼った評価ではなく、フィジカルアセスメントを含めた循環系のパラメータを総合的に評価することが重要と考えられる。

文献

- 1) 飯田 祥, 黒田 智也, 曷川 元 ほか. 職種による離床時の血圧測定の実施頻度の違い. 早期離床, VOL.5, p43, 2018.

著者情報：飯田 祥 * 黒田智也 * 曷川元 *
* 日本離床研究会 学術研究部